

じょう かん す い せき
上 罐 子 遺 跡

みえてきた伊都国人のくらし

出土木製遺物の概要



三角形の赤土の丘陵が上罐子遺跡

1996年
前原市教育委員会

はじめに

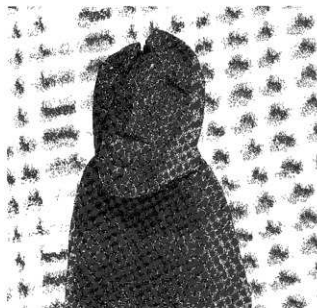
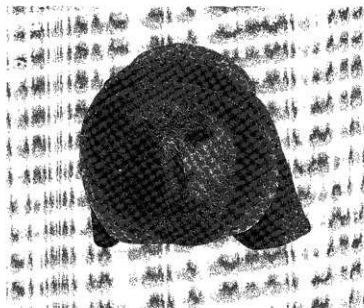
前原市は「魏志倭人伝」にその名を連ねる「伊都国」の地として全国に知られています。1994年に前原市教育委員会が発掘調査を実施した上鍾子遺跡からその伊都国がもっとも栄えていたとされる弥生時代中期から後期にかけての人々の暮らしを伝える土器、石器、木製品などが出土しました。

なかでも木製品の数は1500点を越え、その種類も農具、工具、建築材、祭祀具など生活の多岐にわたっており、当時の人々のくらしぶりを生き生きと伝えてくれます。種類が豊富であるとともに、その作りの見事さにも驚きを覚えます。

現在、発掘調査の成果をまとめるため、資料の整理、検討を行っているところですが、用途不明のものも多く、将来にわたる検討、検証が必要になることでしょう。

1996年3月29日

前原市教育委員会
教育長 榑木 昭生



弥生時代の伊都国人の顔？

右上：顔に入墨をした人
下2つ：動物形木製品の顔 丸顔と面長顔

1. 上籬子遺跡の位置

福岡県の西端部にある糸島地方は、海に突き出て低い山岳が連なる半島部と、背後に高い山岳を有した扇状地や平野が広がる内陸部の2地域に分けることができます。現在この両地域の間には幅1kmほどの湿地帯がありますが、古代には陸地は泊と志登の間がつながっているだけで、加布里と今津の両方向からは大きく内海が湾入していたとされています。

遺跡の分布をみると、半島部では深江井牟田遺跡や御床松原遺跡など砂丘や潟地から縄文から古墳時代の遺跡が多く発見され、古くから海と深い関わりをもって生活していた様子がしのべられます。内陸部をみると、河川の流域に形成された堆積平野や河岸段丘上に、弥生から古墳時代の多くの集落遺跡が発見され、特に川原、瑞梅寺、雷山の3川によって形成された怡土平野には三雲・井原遺跡群、怡土城など糸島の主要な古代遺跡の大半が集まっており、古代糸島の中心はこの地域であったといってもいいでしょう。

上籬子遺跡は、深く湾入していたとされる内海から南へ約2kmほど入った標高20m前後の低丘陵地帯にあり、三雲・井原遺跡群の北西約4kmに位置します。付近からも弥生時代から奈良時代にかけての集落、墳墓など水きにわたる人々のくらしを示す遺跡が多く発見されています。



糸島地方の地形略地図 (約20万分の1)

2. 遺跡の概要

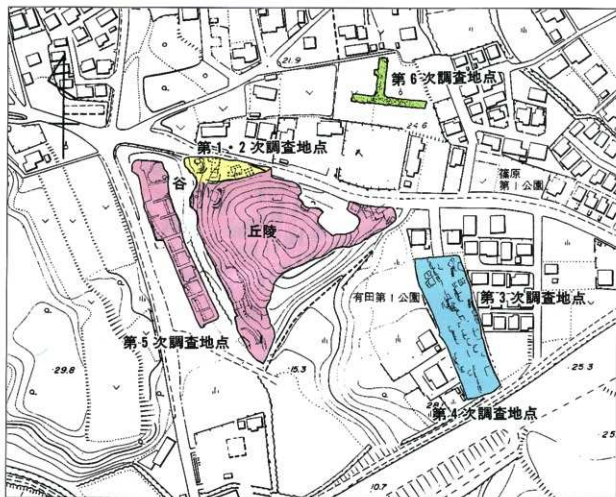
上鍾子遺跡の発掘調査は東側の丘陵地と西側の谷の湿地部に分けて実施しました。

丘陵地では、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居、掘立柱建物、奈良時代の鍛冶遺構、高床倉庫、炭窯などが発見され、谷の湿地部からは弥生時代後期の土壌、古墳時代の取水施設などが発見されました。

上鍾子遺跡は、この谷を隔てた西の丘陵地にも同時期の多数の竪穴住居が調査されており、集落が広範囲にわたって営まれていたことがわかります。



木製品が出土した谷部



上鍾子遺跡の地形とこれまでの調査地点 (1/2,500)



木製品出土状況



はしご



三又鉞と斧の柄



琴出土状況



脚付盤

今回の調査で注目されるのは、谷の湿地部で発見された弥生時代中期から後期を中心とした多量の生活用品です。土器、石器などとともに1500点を超える木製遺物が発見され、弥生時代の伊都国の人々のくらしぶりを知るうえで貴重な成果となりました。

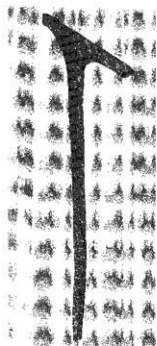
出土した木製品は、農具、工具、漁具、調理具、建築材、祭祀用具など生活の多方面にわたっています。遺物の大半は使用中にこわれたために廃棄されたものがほとんどですが、祭事に使用されたとみられる木製品や人物を線刻した板、製作途中で水中保管していたとみられる杓子や容器などの未製品、貯木していたとみられる建築材群なども発見され、この谷間が生活の一部として貴重な空間であったことがわかります。

また、土器や木製品などの他に中国の「新」時代の貨幣とされる貨泉が一枚出土しており、当時の伊都国と中国大陸との交流の様子をうかがい知ることができます。

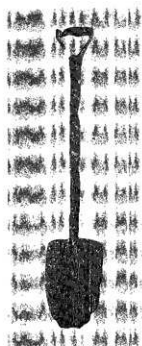
3. 出土木製品

農具

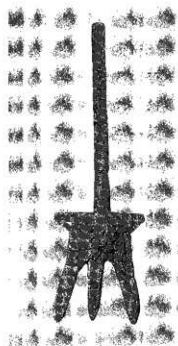
鍬、鋤、えぶり、竖杵、臼などが出土しました。鍬や鋤はさまざまな形態のものがあり、用途や土質によって巧みに使い分けて作業をしていたのでしょう。柄付の鍬も出土しており、現在と同じように柄壺にはくさびを打ち込み、鍬の刃を固定していました。



鍬の柄（長さ76cm）



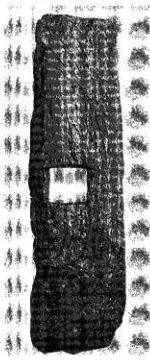
鋤（スコップ状・長さ93cm）



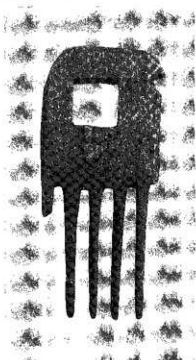
鋤（三又・長さ64cm）



鍬（広鍬・長さ約31cm）



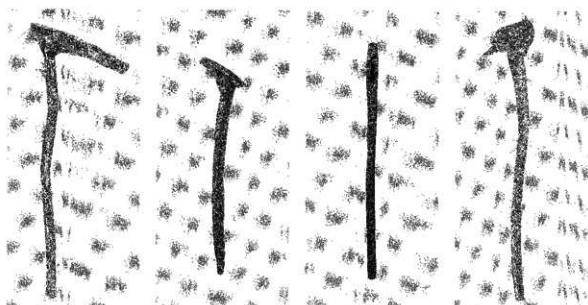
鍬（諸手・長さ約34cm）



鍬（又鍬・長さ23.7cm）

工具

石斧や、鉄斧の柄などが出土しました。弥生時代後期にはすでに、鎌、斧の刃には鉄製品がかなりの割合で普及していたことがうかがえます。



石斧柄半製品(長さ50cm)

石斧柄(長さ33cm)

鉄斧柄(長さ74cm)

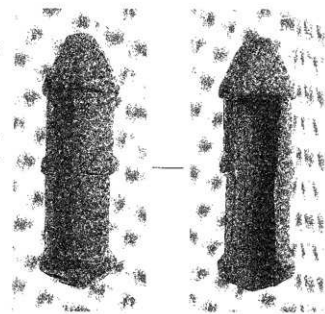
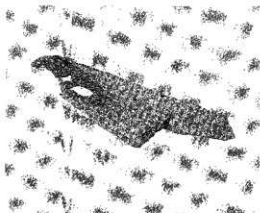
鉄斧柄(長さ72cm)

漁具

網の枠を結合する部材が出土しています。

運搬具

舟の船尾と思われるものや、形態の違う背負梯子が2体出土し、話題になりました。



網枠部材(長さ18.5cm)

舟?(長さ約105cm・幅32.5cm)



背負梯子 (高さ約72cm)



背負梯子出土状況

一体は角材を鳥居形に組み、上部に背板をはめこんでおり、他方は長方形に角材を組み、下端枝分かれ部を利用して荷受けを削りだしています。背負縄は残っていませんでした。

杓子類

しゃもじ状、ひしゃく状、スプーン状、つるべ状などさまざまな形をしたものが出土しました。しゃもじ状製品には黒漆が付着していました。製作途中の半製品も2点出土しており、集落内で作られていたことがわかります。



杓子 (左から2番目の長さ42cm)



しゃもじ (長さ約52cm)



杓子半製品 (長さ39cm)



杓子半製品 (長さ27cm)

容器

容器類もいろいろな形態のものが出土しています。



漆塗脚付容器出土状況 (径24cm)

高杯状の杯部に、ハの字型にふんばる下駄状の脚を削り出しています。杯部の口縁部は黒漆の下地に赤漆で放射線状に細い線を描き、内面は赤漆を塗って仕上げています。

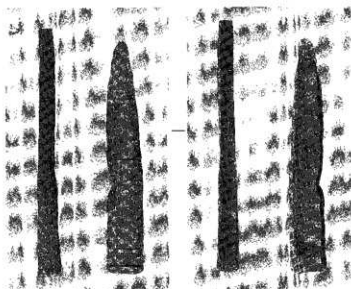
下の写真の容器は、厚さが2~3mmほどしかなく、口縁部には糸状のものを巻き、黒漆を塗って固めています。表前面と、内側にも黒漆を塗っています。



把手付容器 (長さ28cm)

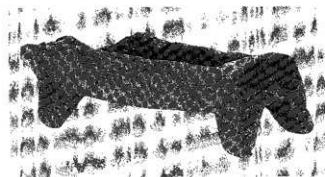


黒漆塗容器 (幅約9cm)

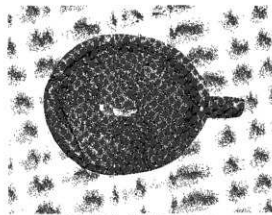


桶状容器（左長さ20.4cm・右長さ19cm）

復元すると口径約12cmの樽形の製品になります。底は円形の板を下からはめこむようになっています。胴部には3ヶ所に、幅約3mmの突帯が2条づつめぐっています。



四脚付箱形容器（長さ35cm・高さ約10cm）

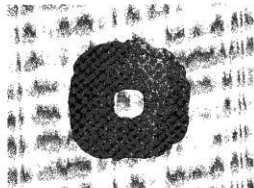


皿状容器（長さ約17.5cm）

建築部材

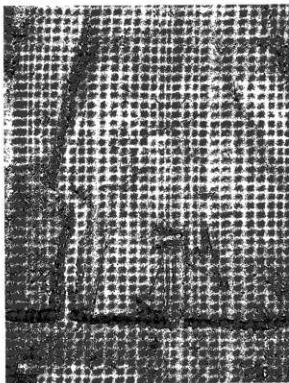
柱材、ねずみ返し、扉板、扉の把手、はしごなどが出土しました。腐食を防止するためにでしょうか、根元を焼いている柱もありました。

調査地点では建築材が整然と並んで出土した箇所もあり、建物の解体後、再利用を待って水中に貯蔵されていたと考えられます。



ねずみ返し

建築材がまとめて出土した状況

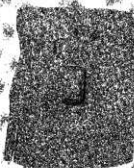


その他生活用品

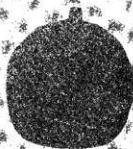
蓋類や横槌、機織具、自在鉤などがあります。従来知られている古代の琴は4～6弦なのですが写真の琴は7弦あり、大きさも小型であるため、祭事に用いられたものであるかもしれません。



蓋 (長さ38cm)



蓋 (長さ27cm)



蓋 (長さ25cm)



横槌 (長さ約30cm)



おさ (長さ68cm)



琴 (長さ30.4cm)



自在鉤 (高さ約25cm)



自在鉤 (高さ約35cm)

祭祀用具

動物を模したのものや、人物や動物を線刻した琴の部材、武器を模したものなどが出土しました。いずれもはっきりとした使用目的はわかりませんが、なんらかの祭りごとに用いられたのではないかと考えられます。

動物形木製品

犬（猪？狼？）形のものや鹿？がうずくまっているような姿をしたもの、水鳥の形をしたものが出土しました。



動物形木製品(左：鹿形 高さ11.5cm)
(右：犬形 長さ25.5cm)



水鳥形木製品(高さ約9.5cm)

人物線刻板

中国の史書『魏志倭人伝』には倭人の習俗として「男子は年令の大小なく顔や身体に入墨をする」ことが記されています。その魏の「使節が常に留まった」伊都国の地でこの記述を裏付ける資料となる木板が発見されました。長さ15cm、幅10.5cm、厚さ6mmほどの板の一面に不思議な人物を描いた線刻画が発見されたのです。この板に描かれた人物の顔には、こめかみから眉間を通りほほに達する入墨を表現した

ものではないかとみられる重弧文線が描かれ、右側頭部には羽飾り状のものをつけていました。身体には腰を絞った衣服をまわっていたようです。衣服や頭部の飾りの表現、右手を横にのぼした姿勢など佐賀県の川寄吉原遺跡出土の銅鐸形土製品の線刻表現と類似する点がみられ、当時の北部九州における祭祀の在り方を考えるうえでも貴重な資料です。

琴

共鳴槽の側板とみられる板2枚に鹿や水鳥などの動物、釣針が描かれています。古代において、鹿や水鳥は靈獣・靈鳥として人々の信仰を集めたとされており、銅鐸などの青銅器や土器の意匠の中に多く用いられていますが、木製品に描かれている例は少なく、貴重な発見となりました。





線刻琴部材
(長さ約40cm、幅8.5cm、厚さ約1.2cm)



雄鹿 (幅約3cm)



鹿? (家?) (幅約4.5cm)



鹿? (幅約6cm)



線刻琴部材(長さ約37cm、幅11.5cm、厚さ約1.5cm)



雄鹿 (幅約3.5cm)



釣針 (大きい方の釣針の長さ約9cm)



鹿? (左・幅約6cm)

武器状

狩猟や戦闘には実用的でなく、やはりなんらかの祭事に用いたと考えられる矢、盾、槍、矛などを模したものが出土しています。

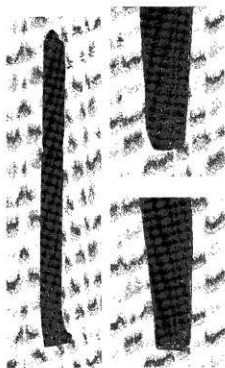
はっきりとした用途は不明ですが、下端部分に装飾をほどこした柄もありました。



矢形（長さ上約54.5cm、下約35cm）



盾？（高さ約45cm）



槍形（長さ約31cm）



矛形？（長さ約12cm）



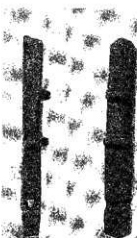
用途不明品（長さ約32cm）

用途不明品

用途が明確でないもの、また、何かの部材ではあるけれども、どのような機能を果たすのかわからないものも多く、民具資料との比較検討も重要な課題です。



熊手状 (長さ約44.1cm)



用途不明品 (長さ約17.5cm)



用途不明品 (長さ約25cm)



栓? (径約6.5cm)



用途不明品 (長さ約32cm)

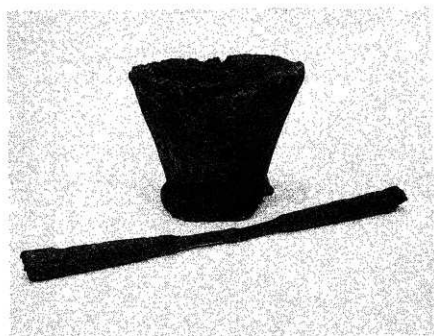
おわりに

現地での調査を終え、はや一年が過ぎようとしています。出土した遺物は報告書の作成にむけて少しずつ整理を続けていますが、今回紹介した資料以外にも検討が必要なものも多く出土しており、その機能、用途、果ては呼称にいたるまで頭を悩ます毎日です。

このように検討課題が山積みで、前途多難ではありますが、本報告の刊行に向けて今後とも資料の整理、検討を進めていきたいと考えております。多くの方々からのご指導、ご助言をいただきますようよろしくお願いいたします。

なお、本書に掲載した資料名のなかには仮称のものもあり、本報告では変更する場合があります。また表示した計測値は概測ですので大きさの目安とお考え下さい。

本書の執筆、編集は前原市教育委員会文化課、岡部裕俊、野田純子が行いました。



上鐘子遺跡から出土した臼と整杵
臼の高さ40cm、整杵の長さ107cm

上 鐘 子 遺 跡

平成8年3月29日

発行 前原市教育委員会

印刷 赤坂印刷株式会社

福岡市中央区大手門1丁目8-34